

# パゴダと寺院の国 ミャンマー(ビルマ)の旅

ニューヨーク  
州立大学教授

伊藤 博

昔、竹山道雄の『ビルマの豎琴』を読んで以来一度訪ねてみたいと思っていました。幸い黒田方丈の御援助もあり大学の冬休みを利用して一週間ほどミャンマーの仏跡を中心に旅することができました。首都のヤンゴン(旧名ラングーン)と第二の都会マンダレー、それに二千以上のパゴダ寺院があると言われるバガン(旧名パガン)を車で廻ってきました。

日本の十二月はビルマの乾期に当り一年中でも最も凌ぎ易い時期です。中国系ミャンマー人

の旅行社の社長が自ら空港に出迎えてくれ、色々取計らってくれましたので快適な旅ができました。但しミャンマーは日本の一・八倍もの広さで幹線道路さえほとんど舗装されていないので移動に時間がかかります。道が狭い上穴が多く、対向車や自転車とすれ違う時何度もひやひやしました。中古車が多く、あれ程道端でパンクしたり故障して立往生しているのを見た事もめずらしいです。

夜中車を飛ばし朝早くメイッテイラと言う、

国のほぼ中央にありバガンとマンダレーの分れ道になる重要な産業交通地点に着きました。マンダレーをも含むこの地域は第二次大戦中十八万人もの犠牲者を出した激戦地でした。戦後メイトイラ湖の守護神であるナガヨン（竜神）パゴダ（一二〇二年建造）を日本とミャンマーの仏教徒教会が協力して改装して戦没者を葬いました。ミャンマーに来て初めて見るせいかとても鮮やかで印象的でした。塔内には仏舍利と仏四体が安置されています。

## マンダレー

ヤンゴンとは対照的にマンダレーはイギリス植民地時代以前の伝統的なミャンマー文化の粹を窮めた、日本の京都の様な文化都市の感じがしました。仏教のビルマへの伝来は商人や仏教徒達が大乗小乗両派をこの地に伝えた時に始まります。特に仏教の敬虔な信者として知られて

いるインドのアショカ王が紀元前二六〇年頃マンダレーを訪れたのが記録に残っておりまう。しかしそれから千三百年以上たった一〇五六年にビルマのアナラッタ王が今のスリランカの上座部仏教を導入した事により現在の型に定着しました。その年、国民の間に受入れ易くする為一種の妥協策として、アナラッタ王は従来の土着の自然信仰のうち、仏教の教えにあまり反しない三十六の精霊（ナッツ）を残し他のナッツを崇拜する事を禁じました。そしてタキ・ミアンというナッツを仏教の守護神として加え、合計三十七体の精霊をバガンに新しく建てたシユエズイーゴン寺に祀りました。時が経つにつれて人々は古い精霊をお祀りに来る時、仏教という新しい信仰を見出し拝む様になりました。パゴダや寺院に飾ってある三十七のナッツの他にもミャンマーの社会には無数のナッツが今でも日常生活に生きています。そもそもナッツ

は破壊的なあばれん坊の性格を持つている精霊で、いかにして宥めおとなしくさせておくかに気を使います。家内安全商売繁盛にもナツツは関係してきます。ミヤンマーの家庭には死者の霊を祀る習慣はなく位牌も置いてありません。その代りに小さな仏像を家の中や玄関の南側に置いたりしてお参りします。家のナツツを祀る為、赤と黄色の布地で仏像を巻き、お供えにコナツの実を吊してあります。街角には紐で結んだ花卉を髪に挿した女性や車のバックミラーに飾った花卉をよく見かけますが、これはナツツに捧げる意味もあります。

さてマンダレーはミヤンマー最後の王朝（一八六〇—一八八五）として栄え、当時の王宮が広大な敷地に復元されています。本殿を始め数多くの宝物、調度品等が今でも王宮内の博物館に飾られており、在りし日の王侯貴族の優雅な生活振りが偲ばれます。ただ一つ不似合いなの

マンダレー王宮でのロケーション



は漆塗りの豪華な建造物の屋根がトタン張りでいかにも安っぽく見えます。これは王様は銀色の屋根の下に住むという伝統に基づいているからです。王宮を囲む一方が七十メートルもある堀には昔舟遊びに使った木造船が復元されレストランになっています。最後の王ティーボーは国防や政りごとに嫌気がさし、仏事に没頭した結果イギリス軍にその座を追われインドに追放



マンダレーの丘に建つ寺院

されました。マンダレー王宮にあった「獅子の玉座」がロンドンに持って行かれましたが、その一つがヤンゴンに戻され、国立博物館に飾ってあります。

マンダレーにあるパゴダや寺院はほとんどが初代のブンミン王の建造による物です。マハムニパゴダはマンダレー最大のもので、本尊は四メーターもあります。十八世紀後半よそからわざわざ運んで来た物で、金属でできており、信者が貼り付けた金箔で表面がピカピカに光っています。ところで金箔の精錬は、三年間も水に付け柔らかくなった竹の皮に金粉を包んでその上からハンマーで何回も叩いて作る地場産業です。マハムニ仏の他にカンボジヤで作られた六体の人やライオンの青銅の像が祀られており、それ等に触ると病気が治ると云われ沢山の人がお参りに来ている。境内の博物館にはお釈迦様が悟りを開くまでの話が大きな絵に書かれて沢山

飾ってあります。

次に市の東北にあるマングレーの丘に登りました。町全体が見渡せる丘の頂上にはいくつかの寺院が建っています。本堂にはパキスタンのペシャワールからアシヨカ王が運んで来たと言うお釈迦様の骨が祀ってあります。

丘の麓にあるクドードパゴダは特徴のない物ですが、それを取巻く七百以上の高さ五メートル程の小さいパゴダの一つ一つには大理石で出来た石板が立ててあり、その表面には経律論の三蔵の全文が次々と彫られており、これは世界一大きな經典だそうです。七百三十番目の石板にはグンミン王が二千四百人の僧侶を集め半年がかりで作らせた過程がこと細かに彫ってあります。このクドードパゴダの近くにあるシュエナンドー寺院は珍しく木造で、内側、外側共に繊細な彫刻が施され、土と石でできている東南アジアのほとんどの仏跡とは対照的です。長年

風雨に曝され朽ち果てていますが、歴史の重みを感じます。この寺院でクンミン王が亡くなりティーボー王がしばしば瞑想に更けりました。

## 功 徳

街角ではロンジー（腰巻）を着けた男女が麻で作ったジャンバッグを肩に掛け、ゴムのサンダルを履いてゆつくりと行き交うのどかな光景をよく見かけました。又道行く人が気軽にパゴダや寺院に立寄ってお参りしています。

車で移動する際、寺院主催のお祭りを見ました。ドラ、太鼓、シンバル、琴や笛の演奏に乗って歌ったり踊ったり賑やかでした。人形劇や芝居も繰り広げられお釈迦様の話や色々のナツツの話に皆聞き入っています。

マングレーをイラワジ川に沿って南下すると四十年ほど王朝として栄えたアマラプラに出ます。今はひっそりとした町ですが、石仏や仏

具の家内工業の町として知られ台湾などにも輸出しているそうです。すぐ近くの湖に架つている大変長い木造の橋は二百年前に造られたそうで、その下で水牛を使つて農作業する人や、魚を釣っている人の点在する白いパゴダを背景に絵葉書にもなる景色です。最後に今でも使われている僧院を覗きましたら出家した子供や若僧侶が各々の日課をしておりました。

例え一日でも一週間でも出家して修行する事が一番の功德とされていますが、出家をしない一般の人々は修行僧の為に僧院を維持し僧侶の為に食物や袈裟を用意し身の廻りの世話する事が同じ様な功德とされています。車の窓からよく見かける風景でしたが、大人も子供も道端に立ち、鳴物で行き交う車の注意を引き運転手の投げる小銭を集めてお寺や学校の施設に寄附しています。

パゴダを建てるのが最大の功德とされている

アマラプラの田園風景（マングレーの南）



ので至る所にパゴダや寺院が見られます。しかしこれは裕福な人だけがができる事なので一般人は戒律を守る他、諸々の善行を心掛けるわけです。例えば喉の渴いた旅人の為にいつでも水瓶を置いておくとか、鳥籠の中の小鳥を何がいかにお金で買取り放してやる事が今でも行われています。この際小鳥を取って売る人の行為はどう解釈するのでしょうか。ミヤンマーでは魚や動物を殺すのを悪と考え従来中国人や回教徒の仕事とされており、仏教徒が殺生すると後世で一番下等な動物として生れ変るとされ、社会的にも肉屋や魚屋は見下げられてきました。

## バガン

次の目的地バガンはインドネシアのボロブドールやカンボジアのアンコール・ワットと並ぶ三大仏跡の一つとされています。萬ずのナッツが宿る聖山ポパを右に見ながらバガンの町に入

りました。マンダレーが絢爛豪華な仏教都市とすれば、バガンは二千以上ものパゴダや寺院が集まっている赤茶色の荒涼とした大地です。パゴダは全部土で盛った丘でお釈迦様や高僧の遺品が埋っています。寺院は空洞で中に仏像が置いてあり、外側はテラスが幾段にも積み重ねられ、上に行く程小さくなっていて頂上はストウパーの恰好をしています。丸型の寺院は入口が



バガンの尼僧

一カ所しかなく、そこ迄参道が続いており、正方形の寺院は四カ所入口があります。一つ一つの仏跡も見事ですが無数にある遺跡の全体の景色は圧巻です。

バガンの遺跡はほとんどが十一世紀から十三世紀に建てられた物です。十一世紀の中頃これ迄ミャンマーで栄えていたヒンズー教や大乘仏教が衰え南方上座部が広まり始めておりました



バガンの古寺

が、時の王アノラタが一〇五七年にミャンマー最初の王朝を確立しました。征服したモン族から經典やお釈迦様の遺骨を持ち帰りシュエズイゴンパダの建立を始めとする仏教都市作りを専念しました。十三世紀末クビライカンの率いるモンゴル軍に滅びる迄二百余年仏教文化の中心地として栄えました。

アナンダパゴダと僧院は高さ五十メートル以上もあり、バガン王朝のパゴダ建設を代表する最も美しい物と言われています。正方形で四つの入口があり、その一つには仏の足跡が二つあります。中はひんやりとし、奥に十メートルもある仏像が四隅に置かれています。次に国会議事堂を思わせる様な形のダビニユ寺院はバガンで一番高い建物で二層になっており、上の方に大きな仏像が置いてあります。上のテラスに登ってイラワジ川の対岸に沈む夕日を眺めました。最後に河岸に建っているシュエズイゴンパゴダ



はバガンにある最古の代表的なビルマ建築物です。金色に輝く塔にはお釈迦様の齒のコピーと骨二本が納められています。四隅にはストウーパーに飾られた四メートル程の仏像が置いてあり、又薄暗い中にフラスコの絵が見られます。その他二十以上のパゴダと寺院を精力的に廻りましたが、中には時代により中近東の顔かたちをした仏像やモンゴル軍が書いた壁画等も残されています。これ等のパゴダの囲りにはお供えの花を売る店や小さな仏像や仏具を売るおみやげ屋が立ち並んでいます。マンダレーは漆が有名で工房に行きますと馬の毛を椀状に編みそれを漆で固めた食器を作っています。手で押しと形が変わりますが、変わっても中の汁は洩らないのは不思議です。

## ヤンゴン

バガンからヤンゴンに戻るとあたかも別の国

に來た感じでした。それ迄訪れた場所に比べ建物や町並みを見ると百年以上のイギリスの植民地時代の影響がはつきり感じられます。とは言ってもヤンゴンの歴史は「聖なる黄金の塔」と言われるシュエダゴンパゴダに始まります。どぎつい程に強烈な印象を与えるこのパゴダは高さ百メートル近くもあり、頂上には大きなダイヤモンドが使われ、他に数千のルビーやエメラルドが眩いばかりに輝いています。このパゴダは昔ミヤンマー商人の兄弟がインドに旅した時、仏様に会い聖髪をいただき奉納した場所です。この仏舎利塔の周りには無数のパゴダと四つの祈念堂と動物像があります。

ビルマの暦は一週八日あり、一日一日が一定の方角を指し、動物を祀っています。例えば月曜日は東を指し、お月様を象徴し、嫉妬深い虎の性格を表します。又一週間の最後の日である八日目は北西を指し、架空の空を象徴し冷静な



バガンのパゴダの頂上で日の出を待つ

ヤンゴン川



象の性格を表すそうです。そして自分の生れた曜日動物を拝んでいる人を沢山見かけました。蛇を表す土曜日生れの人は鼠を表す木曜日生れの人とは性が合わないので結婚しない方が良いと言われています。

ヤンゴンには釈迦誕生二千五百年を記念して建てられたバーエーパゴダがあります。デザインが斬新で内部の仏像も抽象的超モダンなものです。ここで開かれた世界仏教徒大会（一九五二―五六）には日本からも学者が出席し、更に神奈川県仏教会は仏像と梵鐘を寄進したそうです。モン族が一番早くミャンマーに上座仏教を取り入れましたが、後十三世紀から十八世紀にかけてペグーに王朝を作りました。ここには全長五十五メートルもの白塗りの涅槃像があります。世界一大きいそうですが割にやさしい顔付きをしています。郊外には巨大な仏像が四体四方に向って立っています。古都ペグーはヤンゴンか

ら北八十キロほどの所にあり日帰りが可能なので観光客で賑わっています。

### ミャンマー・今と昔

ミャンマーは約四千万の人口でその七割がバーマ族で残りは百二十以上の少数民族で成り立ち、必ずしも統一国家とは言えません。人口の大半がイラワジ川の土地の豊かな下流に住み、残り三分の一は北部に住んでいます。イギリスはミャンマーを同じ統治下にあつたインドの九州として百年以上植民地支配をしてきました。一九四八年に部族紛争未解決のまま独立しましたが、シャン族が反乱を起し内線の兆しが高まりました。それを理由に軍部が独裁体制を確立し今日に至っています。それ迄ヤンゴンは東南アジアでもバンコックを遙かに凌ぐ交通や貿易の拠点でした。しかし植民地主義への反対として軍事政権は鎖国制作と社会主義的経済

を取入れ外国の影響を徹底的に排除した結果、国際社会から完全に孤立してしまいました。

ミャンマーの識字率は本来比較的高かつたろうですが、これは寺小屋式教育によるところが大きく、一九六〇年代の軍事政権は寺院の勢力が増大するのを恐れ僧侶を登録させ監視を強めたりしてミャンマー社会に於る寺院の實際的役割を著しく弱めました。政府の手に移った教育も問題が多々ある様です。しかし寺院は仏教本来の道を通じて人々に深い影響を及ぼし仏教は生活の行動原理となっております。アジアの社会でありながら男女平等が浸透し財産の共有権や離婚の自由も実践されております。

軍事政権による「ビルマ式社会主義」は完全な失敗に終り、一九八七年国連はミャンマーを最低発展途上国に指定しました。翌八八年一党独裁に反対して起った民主化運動も軍の発砲弾圧に会い空しく後退しました。更にアウン・サ

ン・スー・チー女史の率いる国民民主連合の国民会議の総選挙での圧倒的な勝利とその後の同女史の自宅軟禁は日本を始めとする西洋の批難の的となり、かつて最大の援助供与国であった日本は援助を凍結しております。対抗策として軍部は新憲法の生徒と民政への移行を約束していますが、準備中の草案では議員の二十五パーセントは軍人で占める事になっていたので、現状はあまり変らないでしょう。経済面では市場解放を打出し、少しながら国营企業の民営化や貿易及外資の自由化に切換えています。年平均六パーセントの経済成長を果し、中国、タイ等の隣国を中心とした貿易も活発になっておりますが、インフレが未だ二十パーセントもあり、一人当りの年間国内総生産額が二百五十ドルという低いものです。

一九六〇年代に行つた農地改革も不徹底のままで土地のない農民が部落の半数近くもいます。

それで農産物輸出国になる為には平等な土地の再分配は生産性低下になるのでできません。その為、余剰の農業人口は建築ブームのヤンゴンやマンダレーに集中し都会のスラム化とそれに伴う社会問題を生む虞があります。今後の課題はいかにして民政に戻り、部族を統合し、近代国家に向けて第一歩を踏み出すかという事です。そして人口の八十パーセントを占める仏教徒がいかに仏教の精神と近代化・産業化とを調和発展させるか皆が注目しているところです。

